



みゆき

小松市立御幸中学校

学校だより

NO. 3

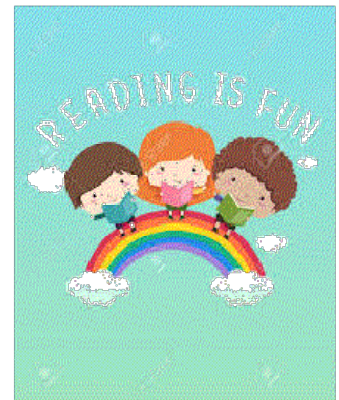
令和2年7月27日

文責：校長 河南光昭

21世紀人になるために・・・

間もなく1学期を終え、夏休みに入ろうとしています。例年と違ってさほど長い休みではありませんし、すでに夏休みの課題が提示されていますので、本当の意味で夏休み気分になれないかもしれません。ですが、こんな時にこそ、皆さんにはぜひ読書に親しんでほしいと思います。読書の効能をここで論じるつもりはありませんが、様々な文章に触れて、自分の想像力や価値観を豊かにしてください。

以下に著名な作家の文章を載せますが、これを読んで21世紀に生きる皆さんの生き方について考えてみましょう。



司馬 遼太郎

さて、君たち自身のことである。

君たちは、いつの時代でもそうであったように、自己を確立せねばならない。自分に厳しく、相手には優しく、という自己を。そして、素直でかきこい自己を。

21世紀においては、特にそのことが重要である。

21世紀にあっては、科学と技術がもっと発達するだろう。科学 技術が、洪水のように人間をのみこんでしまってはならない。川の水を正しく流すように、君たちのしっかりした自己が、科学と技術を支配し、よい方向に持って行ってほしいのである。

上において、私は「自己」ということをしきりに言った。自己といっても、自己中心におちいってはならない。

人間は助け合って生きているのである。

私は、「人」という文字を見るとき、しばしば感動する。ななめの画^{ななめ}がたがいに支え合っで、構成されているのである。

そのことでも分かるように、人間は、社会をつくって生きている。社会とは、支え合う仕組^{しく}みということである。

原始時代の社会は小さかった。家族を中心とした社会だった。それがしだいに大きな社会になり、今は国家と世界という社会^{こもろ}をつくり、たがいに助け合いながら生きているのである。自然物としての人間は、決して孤立して生きられるようにはつくりだされていない。

このため、助け合う、ということが、人間にとって、大きな道徳になっている。

助け合うという気持ちや行動のもとのもとは、いたわりという感情である。他人の痛みを感じることに言ってもいい。やさしさと言いかえてもいい。

「いたわり」「他人の痛みを感じること」「やさしさ」

みな似たような言葉である。

この三つの言葉は、もともと一つの根から出ているのである。



根といっても、本能ではない。だから、私たちは訓練をしてそれを身につけねばならないのである。その訓練とは、簡単なことである。例えば、友達が転ぶ、ああ痛かったらうな、と感じる気持ちを、そのつど自分の中で作りあげていきさえすればよい。この根っこの感情が、自己の中でしっかり根づいていけば、他民族へのいたわりという気持ちもわき出てくる。

君たちさえ、そういう自己をつくっていけば、21世紀は人類が仲良しで暮らせる時代になるのにちがいない。

鎌倉時代の武士たちは、「たのもしさ」ということを、大切にしてきた。人間は、いつの時代でもたのもしい人格を持たねばならない。人間というのは、男女とも、たのもしくない人格に魅力を感じないのである。

もう一度くり返そう。さきに私は自己を確立せよ、と言った。自分に厳しく、相手にはやさしく、とも言った。いたわりという言葉も使った。それらを訓練せよ、とも言った。それらを訓練することで、自己が確立されていくのである。そして、“たのもしい君たち”になっていくのである。

(司馬遼太郎「21世紀に生きる君たちへ」より)

確かに今の社会の中で起こっているさまざまないま忌まわしい出来事からすると、今一度、「いたわり」「他人の痛みを感じること」「やさしさ」という意味を問い直してみなければならぬような気がします。

例えば、科学・技術の粋を集めた原子力発電も「想定外」という言葉とともに、その「安全神話」が崩れさりました。今、その再稼働をめぐる

日本中で議論が展開されていますが、なかなかすっきりとした回答が出てきていないのが現状です。



また、SNSが高度に発達し、5Gとよばれる高速・大容量通信が可能となり、映像やデータが瞬時に送受信できるようになりました。それだけ多くの情報が今まで以上に世界を飛び交い、また、個人が発信源になったり受信したりできるようになって、21世紀になってからの情報化の進歩は著しいものがあります。ですが、その一方で、プライバシーの問題や匿名の批判・誹謗・中傷などの社会問題も一方では派生しています。



皆さんの「いたわり」「他人の痛みを感じること」「やさしさ」をしっかり持った自己が、科学・技術を支配しながら、よりよい方向に進んで、次の世代へと受け渡していくことが望まれているのかもしれない。

